

第四十七回 「全日本中学生水の作文コンクール」

広島県優秀作文集

令和七年 広島県土木建築局

目次

優 秀 賞

水の「当たり前」を守る

広島県立広島叡智学園中学校

二年

杉岡 愛笑

魚の家を守るには

広島県立広島叡智学園中学校

二年

中津 舞花

奇跡の水―有限な資源との向き合い方―

広島県立広島叡智学園中学校

二年

村上 ゆき

入 選

水を守るために

広島県立広島叡智学園中学校

二年

大島 嵩正

地域の人々の努力

広島県立広島叡智学園中学校

二年

崎本 洸都

水という存在

広島県立広島叡智学園中学校

二年

多部田 明弓

マレーシアから学ぶ水との共存方法

広島県立広島叡智学園中学校

三年

新田 一仁

水が使える大切さ

広島県立広島叡智学園中学校

二年

福永 百花

人と人、心と心を紡ぐ水

広島県立広島叡智学園中学校

二年

松本 樹実

泥水を飲むこと

広島県立広島叡智学園中学校

二年

安永 圭吾

優 秀 賞

水の「当たり前」を守る

広島県立広島叡智学園中学校 二年 杉岡 愛笑

水の都、広島市。六本の川がゆったりと流れるこの地は、「水道水の美味しい都市」の一つに選ばれています。その中でも太田川は、環境省の「名水百選」に選ばれるほどの清らかさを誇ります。広島市内に住んでいた私にとって、この太田川水系の豊かな水に支えられた生活が当たり前でした。水は蛇口をひねれば当たり前のように出て、好きなだけ使えました。家だけでなく公園にも水栓があり、泥遊びをした手を洗ったり、喉が渇くと飲んだりしていました。私は、水は安全で美味しいことが当たり前だと思っていました。

安芸高田市の祖母の実家では、生活用水として山水を汲み上げて使用しています。また、農業用水としても用いています。水路には沢ガニや小さな魚がいて、幼い頃は捕まえて遊んでいました。この山水は、三篠川、そして太田川へと流れ込んでいます。私にとって、田舎の水も、当たり前のようにそこに流れている、きれいで冷たくて安全な水でした。

もちろん、小学生の頃、総合的な学習の時間や社会科の授業で、水俣病や足尾銅山鉱毒事件、世界の水問題について学びました。しかし、当時の私にとってこれらは遠い世界の出来事でありませんでした。「日本に、広島に住んでいてよかった。」とほっとしたことを覚えています。

ところが、この考えの甘さと自分勝手さに気付かされる出来事が起きたのです。有機フッ素化合物（PFAS）問題です。近年、水道水や河川、地下水などから基準値を上回るPFASが相次いで検出されており、広島でも同様の事例が起きたのです。二〇二四年二月には、東広島市の瀬野川水系で国の暫定基準値の八十二倍となるPFASが検出されました。さらに、同じ年、安芸高田市においてもPFAS

が検出されました。PFASは、自然界でほとんど分解されません。そして、環境中や人体内に蓄積されていく、発がん性のある物質です。そのため、「永遠の化学物質」とも呼ばれます。

PFASの問題が報道されるようになってから、母は「水道水じゃなく浄水器の水を飲んで」と言うようになりました。祖母たちは、不安だから山水の検査をしてもらおうかと話しています。今までどこか他人事だった「水の問題」が急に自分の問題になったのです。

PFAS汚染の原因は何なのか調べたところ、原因は多岐にわたり、今の私たちの生活はPFAS汚染とは切り離せないことが分かりました。水を守るためには、私たちの日々の生活を変えていくしかありません。ゴミを減らす、過包装を避けるなど、一見、水とは関係ないと思うことが、水の安全につながっていることを知りました。

私たちが利用できる水は、地球上にたったの〇・〇ー％しかないといえます。これは、一・五リットルのペットボトルが地球上の全ての水だとすると、わずか目薬三滴ほどの量です。二〇二三年、世界人口は八十億人を突破し、今も増加し続けています。人口増加と生活水準の向上に伴い、これからますます水が必要となっていくことが予想されます。

日本は、水の豊かな国だと言われてきました。私たちは、水はいつでも蛇口から出て来るものだと思っています。しかし、水を世界の人と分け合うとしたら、使える水はわずかです。その大切な水を、私たちが好き勝手に生活することでどんどん汚染して使えない水にしてしまったら・・・。

今、私たち一人一人に求められているのは、限りある水資源を大切に使うこと、これ以上水を汚染しないことです。私は自分にできることとして、歯磨きの際に水を流しっぱなしにしないなどの節水に取り組んでいます。水を守ることを「当たり前」にし、水が使える「当たり前」を守っていききたいです。

優 秀 賞

魚の家を守るには

広島県立広島叡智学園中学校 二年 中津 舞花

私にとって一番身近にある水は「海」だ。私は、二〇二十四年の四月から広島県立広島叡智学園（後、HIGAとする）に入学し、家族と離れて寮で生活している。

HIGAのある大崎上島は豊かな森林と海が特徴だ。休日はよく寮を飛び出して友達と森の中を自転車で走り抜けたり、海で貝殻やシーグラスを探し、集めたりする。海には様々な生き物が住んでいて、砂浜に乗り上げてぴちぴち動いている魚をたまに見かける。何匹も砂浜に自ら乗り上げてぴちぴちしているの、なんだか面白いな、かわいいなと思う。時々遠くの方の海を見ると大きな魚が跳ねたりするので、友達と一緒にスマホを構えてシャッターチャンスを狙う。HIGA生の日常は自然と共にあるのだ。

夏になり、海水の温度が上がってくると海で泳げるようになる。二〇二十四年の夏は一回だけ同級生のみんなと海へ泳ぎに行った。海はまだ少し冷たくて、慣れるのに時間がかかった。大串海岸の夏の海にはHIGAの水泳の授業で使われる浮島がある。そこを目指してみんなで泳いだ。その途中でクラゲや小さな魚に出会った。私の身近にある大串海岸がたくさんの生き物が住んでいる、「魚の家」なんだと実感して、胸が温かくなったのを感じた。

しかし、泳いでいる時に見つけたのは生き物だけではなかった。ペットボトルや、ビニールなどのゴミが海に浮かんでいたのだ。そのことに気づいた私は、海からあがって砂浜を少し探索してみた。すると、砂浜にも多くのゴミが打ち上げられていたのだ。

寮に帰ってから海の大切さについて考えてみた。海は地球のシステムを維持するのに必要不可欠な、重要な役割を担っている。海があること

で雨が降り、農作物や山に豊かな水を与え、私たちは生活することができている。海がなければ美味しいお米や野菜、魚が食べられなくなるし、生活に必要な最低限の水でさえも調達できなくなる。つまり、海がなければ私たち人間だけでなく、地球上のすべての生物が生きていけなくなるのだ。そんな「母なる海」を私たちは私たちが生み出したもので汚しているのだ。調べてみると、毎年少なくとも八百万トンに及ぶゴミが世界中から海に流出されており、そのうちの二万トンから六万トンが日本から発生したものだと言われている。また、このまま海にプラスチックが排出され続けられれば令和三十二年（二〇五〇年）には海のプラスチックゴミの量が魚の量を上回ると予測されている。

海に漂うゴミの約八割は街から流出している。つまり、私たちの普段の生活が海を汚していると言えるのだ。しかし、私たちがアクションを起こせば、海洋汚染を少しでも抑えることができるのではないかな。そう考えた私は、自分たちに出来る範囲で海洋汚染改善に貢献できることを「3R」をもとに考えた。まずは、「Reduce」だ。主に、買い物をするときにマイバッグを持参することや、耐久性の高い商品を購入するなどが挙げられる。次に「Reuse」だ。主に、リターナブル容器に入った製品を選ぶことや、使い終わったものをリユース回収に回すことなどが挙げられる。最後に「Recycle」だ。主に、資源ごみの分別回収に協力することや、リサイクル製品を積極的に使用することなどが挙げられる。このように、私たちにできる範囲の改善策は多くある。今後は一人一人ができる限りの改善策を講じれば、海洋汚染は改善されていくだろう。世界中の人が協力しあって、海の環境を守っていく未来を作っていきたい。

かくいう私も、日常の中でたくさんのプラスチックゴミを排出してしまっていたが、魚たちの家である海、母なる海を守るため、海に行った時に少しでもゴミを拾うようになった。これからも続けていきたいと思う。

優 秀 賞

奇跡の水―有限な資源との向き合い方―

広島県立広島叡智学園中学校 二年 村上 ゆき

水は本当に貴重なものなのだろうか。

私たちの日常では、水が無限にあるかのように感じられることがある。しかし、それは本当なのだろうか。

私は、小学二年生の頃まで水は無限にあると思っていた。現在、日本の水道普及率は九十八%を超え、蛇口をひねれば、いつでもどこでも水が出るのが当たり前だった。また、私の住んでいる島は水が豊かで、窓からは海が見え、通学路には川が流れている。中でも祖父母の畑が一番のお気に入り、収穫の時期は祖父母の作る新鮮な野菜を家族で食べるのが我が家の楽しみだった。夏休みに、手伝いで野菜の水やりをするのが大好きだった。このように水と自然に恵まれた生活を送っていた私には、水の大切さがわからず、水のない生活など想像もしなかった。

蛇口をひねれば当たり前に出てくる水。この便利さから水は無限にあると信じていた私の考えは、ある夏の日、一変した。記録的な豪雨が島を襲ったのである。島では冠水や土砂崩れが起き、私の家では突然断水が発生した。初めての断水体験だったため、その重大さを理解するのに時間がかかった。洗面所のバケツの水を慎重に使い、シャワーの水が出ないため、島外にある銭湯に通った。このような生活に家族全員がストレスを感じ、私は水の存在が当たり前でないことを痛感した。断水が終わって、初めて蛇口から出てきた冷たい水を飲んだ瞬間、その爽快感とほっとしたような安堵に包まれて思わず涙がこぼれそうになったことを今でも鮮明に覚えている。

このことをきっかけに水についての調査を始めた。人間の体の約六十%は水で、このうちの十%を奪われるだけで命の危機に陥ってしまう。

さらに、食べ物や健康でいるための手洗いや入浴など全てのことに水が関係している。つまり、水は人間の生存に不可欠なのである。そんな中、世界では蛇口をひねっても水が出てこない国は多く存在し、国連によると世界では約二十二億人が安全な水を飲むことができない状況下にいる。アフリカでは、下痢や干ばつによる農作物の被害で多くの命が失われている。この現実を見ると、蛇口から水が出てくることは本当にありがたく、日本がどれほど恵まれているのか実感した。これは、まさに「奇跡の水」だと思う。

このように、水は人間にとって大切な役割を担っている。そんな奇跡の水を私たちはどのように扱っているだろうか。思い返すと私は水を軽率に扱っていたと思う。日々の皿洗いや歯磨きの際に水を出しっぱなしにしてしまった経験は何度もある。この奇跡の水を守るために私はこれから節水を心がけたいと思う。例えば、水をこまめに止めたり、食器の汚れは拭いて、ため洗いをしたりすることである。このような小さな行動でもため洗いをすれば、一回で九十L、一か月では約五千四百L節約できると言われている。このような行動の積み重ねが限りある水資源を守ることに繋がると考える。

ところで、みなさんは日々どれだけ水資源について考えているだろうか、今一度自身の心に問いかけてみてほしい。未来の地球や世界中の人たちのことを考えて感謝を込めながら水という貴重な資源を使っているかどうかを。節水を一人一人が意識すれば世界は水と優しさで溢れると思う。私たち一人一人が小さな節水行動を積み重ねることで、水資源を守り、未来の世代にも豊かな環境を残せると信じている。私はこれからも水という限りある資源と向き合っていきたいと思う。そして今、私はこのように考える。

水は限りある貴重で大切な資源だ。

入 選

水を守るために

広島県立広島叡智学園中学校 二年 大島 嵩正

私は祖父母の家に帰ると真っ先に行く場所がある。それは家の近くにある地域の方が運営している小さな公園だ。そこには花がたくさん生えており、夏の夜にはイルミネーションで花が綺麗に映るのだ。しかし、まだ子供の僕はそんな花などお構いなしにその公園にいるザリガニに釘付けだった。池の中にひっそりと隠れているザリガニを見つけては毎回嬉しさのあまり飛び跳ねていた。ザリガニには大きなハサミがついており、小学生だった僕は同じく小学生の兄とまだ幼稚園児の弟と目を輝かせて池の細かなところまでのぞいていた。

去年には受験があり、家とは遠い場所にある祖父母の家に帰省できていなかったが、今年は久々に祖父母の家に帰省した。祖父母に挨拶してから早速行ってみると、ザリガニがどんどん出てきた。以前よりたくさん大きいザリガニがあり、喜びと疑問に思い、ふと顔を見上げた時「この場所は私たちが綺麗にしています。」という看板が目に入った。確かに、以前より水も綺麗になっていた。どうやらこのザリガニは綺麗な水を好むらしく、この水のおかげでたくさん繁殖していったようだ。綺麗な水で過ごしているザリガニは以前来た時の汚れている状態よりも生氣に満ち溢れているような感じだった。私は池を掃除をしている人を感じるとともに自分もこのような活動してみたいという憧れの気持ちも芽生えてきた。

そこで私はこの春に奉仕活動をすることにした。私の家は広島にあり、近くに平和記念公園がある。平和記念公園は川に囲まれており、その川と春に咲く桜は最高の花見場所だ。しかし、花見終わりにゴミが川や地面に散らばっているのをよく見かける。私は平和記念公園という

歴史的で綺麗な場所を美しく保つこと。そして綺麗な広島デルタを守るためゴミ拾いと川付近の掃除に取り組む。

実際広島の水は広島デルタに支えられている。広島市の水道水は元からデルタから浄水場などを通して私たちの蛇口から流れ出ている。実は広島市の水道水はミネラル分を適度に含んでおり、厚生労働省から水道水の美味しい都市に選ばれるほどの実力だ。その情報を知ったのは小学五年生の時で当時はすごく衝撃的で、今も住んでいる広島市を誇りに思っている。私が奉仕活動をする理由としていつもお世話になっているため感謝を示したいという気持ちもある。

しかし、全体的に日本の水は年々汚染されていっているのが現実である。生活排水による水質汚濁や、海洋プラスチックゴミによる海洋汚染も課題である。ザリガニの池のように身近な場所から綺麗にすることでこの課題も解決していくと思う。日本人にとって大切な水は保全も汚染も人次第だ。

私は、平和記念公園と広島デルタを守るため奉仕活動をする。そして大切な水をこれからも守りながら、水と心をスッキリした状態で今年もザリガニに会いにいこうと思う。

入 選

地域の人々の努力

広島県立広島叡智学園中学校 二年 崎本 洸都

私の中学校の近くには、海岸がある。それは瀬戸内海を見渡すことができる、大串海岸である。そこで、近くに住んでいた方にお話を伺ったことがある。その人は、「昔は海の水のことなんかなんにも考えてなかったけん、魚が釣れんくらい汚くなっとったんよ。でも、今は綺麗になっているから、どんどん魚がとれるんよ。」このようなお話を聞き、瀬戸内海について興味を持った。

その後、寮に帰って早速、水質について調べた。私が住んでいる。大崎上島は、昭和四十七年には油における海洋汚染の発生件数が八百七十七本件だったのに対し、令和四年には七十二件と大幅に減少しているということがわかった。その後、今自分の持っている知識をもう一度確認してみることにした。その時に知ったのが、バーベキューの後の炭を土に埋めずに持って帰るということだ。てっきり私は、土や海岸に埋めたりしていれば、自然に還って海水なども綺麗になるのではないかと考えていたり、人の迷惑にならないとも思っていた。しかし、たくさんのサイトを见ていると全てのサイトに海に炭を捨ててはならないということが書いてあった。そこで私は確かにと思った。実際に夏休みに帰省した際に実際にしてみた。塩水を作って実際に自分たちが使った炭を捨てずに、塩水につけて振ったりして炭が溶けるか実験した。すると、一週間たっても下に沈殿しているだけで溶けて分解はしなかった。確かに、プランクトンなどがいないので完全な海水ではないのだが、実験結果は炭は海水に溶けないということになった。きっと地域の方々が、このようなことも、ほかのことも行っていたからこそ現存の水質が保たれているのではないかと考えた。そのため、自分も自分でできるようなことから始めてみようと考えた。

後日、また大串海岸に行く機会があった。その時にちょうど海でバーベキューをした後の人たちがいた。海に炭を捨てて帰っていつてしまっていたので思わず声をかけてしまった。インターネットや自分の実験などを元にどうして海に炭を捨ててしまっとはいけないのかを説明した。しかし、その人は、「中学生に言われてもなにかこうするってことにはならない。」と言われその後もなかなか話を聞いてくれず結局、捨てたまま海に帰ってしまった。

このようなことから、私はポスター作りや具体的な措置の説明を行うと良いと考える。ポスターを貼ることで、中学生の意見だともわからないうし、そもそも本当のことを言っているのに海に炭を捨てる人を減らせると考えた。また、捨ててしまった場合の措置を法律を元に考え、それを掲示しておくことによって、捨てる人を減らしていけるのではないかと考えた。海を汚して、せっかく地域の人々が頑張って海を綺麗にしたのにその努力が、未来にはなかったことになっているのはとても残念だ。なので、自分はこれらの解決案を出すとともにこれから、呼びかけをしていきたいと考える。そうするときに私の考える理想の未来が待っているのではないだろうか。

水という存在

広島県立広島叡智学園中学校 二年 多部田 明弓

私は全寮制の学校に通っている。平和な寮生活を送っている中で、一晩だけ水が止まってしまったということがあった。私が今まで生活してきた中で初めての断水の経験だった。今までの普段通りの寮生活が送れなくなった。お風呂に入れなくなったりトイレにも行けない、歯磨きもできなくなったりなど、様々なことができなくなってしまった。

その中で一番大変だったことは、水が気軽に飲めなかったということだ。今までは学校の給水機から何も気にせず水を飲んでいたが断水してしまったため飲めなくなってしまった。私以外のみんなもこの状況が不安になったのか、寮にある自販機で水を買っていた。寮生活を送ってきた中で水が売り切れるということはなかったのだが、売り切れになっていた。この状況を見て普段、水の値段を気にせず飲めるのは当たり前のことだと思っていたなと感じた。そこで世界ではどのくらいの国が水道水を飲めるのかということについて調べた。なんと、世界には水道水をそのまま飲める国が日本以外で九か国しかないということがわかった。このことから私たちは水が気軽に飲める環境は珍しく、水の大切さを知り、大切にしなければいけないのではないかと考える。

しかし日本の現状を見てみると世界の国々と比べて一人の一日あたりの水の使用量が多いということがわかった。「水道技術研究センター(二〇一七年)」の世界の生活水使用量マップを見ると、日本はヨーロッパ圏の、国々より一人あたり約七十リットル以上の水を無駄にしているということがわかった。無駄にしている理由としては多くあるが、その中の一つの原因として、水の出しっ放しが問題になっている。歯磨きの際に三十秒間水を流しっぱなしにしてしまうと、約六リットル無駄にできてしまっている。このことから自分たちの生活の一部が水の無駄使い

に大きく関係しているため、生活を見直すことが大切である。

これからの生活では、水をこまめに止めるということや、お風呂の残り湯を洗濯のための水として再利用をすることによって、水の無駄使いをしないようにしたい。寮生活なため自分ができることは限られているが、節水を心がけ、水は人の生活において大切な存在だということを忘れずに生活していきたいと思う。

入 選

マレーシアから学ぶ水との共存方法

広島県立広島叡智学園中学校 三年 新田 一仁

今年、私はマレーシアの学校へ短期留学をした。初めて降り立った地で、まず目に飛び込んできたのは、日本とは全く異なる水の風景だった。見たこともないほどの大粒の雨が、ものすごい勢いで降ってくるのである。日本ではこれを“豪雨”と呼ぶだろう。しかし、現地の人は何の珍しい顔もせず、果敢に雨の中を歩いていた。この光景に、マレーシアの“水の当たり前”と日本のそれとの文化や価値観の違いを強く感じ、驚かされたことを今でも鮮明に思い出す。滞在中、私も幾度となくスコールの洗礼を受けた。

野球好きの私だったが、現地の人は、大谷翔平選手はもちろん野球にすら馴染みがなく寂しい思いをした。代わりに、マレーシアはバドミントン大国であり、世界大会を連覇した桃田賢斗選手が彼らのスーパーヒーローだった。彼らは皆、私を見ると口々に「モモタ！モモタ！」と声をかけてくる。彼らから勧誘され、バドミントン部に加入した。マレーシアでは一年中真夏の気候で、加えて体育館での練習となるため、水分補給は欠かせない。コーチが笛を吹いて水分補給の時間になるのが待ち遠しかったことは、今となっては良い思い出だ。しかし、ここにもマレーシアの水の当たり前が潜んでいる。それは、飲む水は水道水ではなく、ウォーターサーバーの水だということだ。現地の学校では、至るところに数多くのウォーターサーバーがあった。

マレーシアでは、水道水は飲まない方がよいということを、ウォーターサーバーの多さが物語っているようだった。実際に現地の蛇口をひねってみると、水道水は透明ではあるものの、注意深く匂いを嗅いでみると、わずかに錆びたような匂いがした。そこで、マレーシアの水道事情

を調べてみると、水道管の老朽化により、水道水の飲用は推奨されていなかった。蛇口をひねれば安全な水が出る日本の方が、世界的に見ても珍しいという事実に改めて気づかされた。

また、マレーシアのスコールは、時に街を飲み込むほどの大洪水を引き起こす。その一方で、熱帯の植物たちに潤いを与え、豊かな緑を育む恵の雨でもある。スコールがなければ、ボルネオ島をはじめとする熱帯雨林は存在しなかっただろう。

人々は、スコールとなんとか、共存している。例えば、スコールによる被害を最小限に抑えるため高床式の家を建てたり、排水路を整備したりといった工夫を凝らしてきた。また、スコールによってもたらされる恵みを最大限に活用するため、雨水を利用した農業や生活用水の確保など、様々な知恵を培ってきた。加えて、マレーシアでは豊富な水を資源として捉え、水不足に悩んでいるシンガポールと水協定を結び、国の発展にも活かしている。マレーシアの人々は、水を自然の恵み、そして大切な資源と捉え、水を大切に使い、汚さないように心がけ、水と見事に共存しているのだ。

私は、マレーシアの人々の水に対する姿勢に深く感銘を受けた。彼らのように、私たちも水の大切さを改めて認識し、水と共存していく道を模索していく必要があるのではないだろうか。

地球温暖化が進む現代において、世界各地で異常気象による水害が頻発している。日本も例外ではなく、近年は毎年のように豪雨による被害が発生している。そんな状況の中、短期留学は私にとってかけがえのない経験となった。日本とは異なる生活様式や環境に触れることで、水の大切さに改めて気づき、地球市民としての自覚を持つことができた。私たちは、マレーシアの人々の知恵と経験から学び、水害に強い国づくりを目指すべきだと強く感じる。そして、一人ひとりの水に対する小さな心がけが、未来の地球を守ることに繋がると信じている。

入 選

水が使える大切さ

広島県立広島叡智学園中学校 二年 福永 百花

蛇口を捻れば、蛇口に手をかざせば水が出てきて、飲むこともできる。日本では、これが当たり前になっているのではないか。たまに手洗い場の水道が出しっぱなしになっていることがある。そこで少し水について調べてみると、水道水をそのまま飲むことができる国は、日本を入れてわずか9か国しかなく、世界の多くの国は水道水を飲めない。日本は家庭内で一日使用する水の量を1人あたりで換算すると約230ℓも使用しているそうだ。世界平均の1日での水の使用量は約200ℓだそう。中には、1日に115ℓしか使っていない国や、それ以下の国だってある。日本での生活は、贅沢としか言えない。日本では「飲み水に困る。」ということはあまり考えられないのではないか、しかし、世界では水不足が深刻化している。中には当たり前に清潔な水が確保できない地域だってある。清潔な水が確保できなかった場合にはコレラや下痢などの感染症や肺炎などの病気に感染しやすくなると言われている。このように私たちの生活に大きく関わっている水は、地球の表面に70%が覆われている。しかし、そのうちの97.5%は塩水で、人間が利用できる淡水は残りのたった2.5%に過ぎない。世界の水不足は人口増加や産業発展による「水の使用量増加」と、地球温暖化が引き起こす気候変動により「水利用を非効率にしていること」、人間の生活圏拡大「水源が破壊・汚染されていること」が主な原因だということが調べていく中で分かった。しかし、この原因は私たち一人一人の意識で変わっていくということも分かった。

確かに私も寮で生活していて多くの水を使っている。親の元を離れて自分たちで生活していくなかで改めて水の大切さを感じる。とくに牛乳1滴が水に落ちたとき生き物が使える水にするにはどのくらい

水が必要なのかを知っているだろうか。どれくらい必要なのかということとお風呂9杯分、約2700ℓの水が必要になる。家庭での洗濯1回に使う水量は約50ℓとされているため、約2700ℓもあれば54回分の洗濯することができる。寮生活では、実際に自分で洗濯をしたり、自分たちで食器を洗ったり。そんな寮での生活を通して私は、世界の水不足を解消していくためにはみんなのちょっとした心構え、行動が大切なのだと感じることができる。

少し話は変わるがウィリアム・ジェームズという人物を知っているだろうか。彼は、アメリカで活躍した心理学者だ。彼はこんな言葉を残している。『心が変われば行動が変わる。行動が変われば習慣が変わる。習慣が変われば人格が変わる。人格が変われば運命が変わる。』ウィリアム・ジェームズは人間の意識や心の持ち方が人生全体に影響を与えると考えた。心（意識）が変化することで、行動や選択が変わり、それが習慣となり、最終的には人格や運命に影響を及ぼすという連鎖的なプロセスを示している。私たちにできることはたくさんある。使い終わった食器をそのまま洗剤で汚れを落とすのではなく、ため水につけて汚れを落ちやすくしたり、使わなくなった紙などで油分を拭き取ってから流したりする。洗顔や歯磨きをするときは、コップや桶に水を溜めて使い流しっぱなしにしないことなど。私たちのちょっとした工夫が大切だ。ウィリアム・ジェームズが言っているように習慣づけていくことが未来に繋がってくる。今は、ちょっとしか変わらないかもしれない。でも、塵も積もれば山となる。一人の小さな行動でも長い期間で考えると大きな成果となり、その一人の行動が他の人に影響して大きな運動になればとてつもない活動となる。これからも、この地球で暮らしていくためにも私は日々、水を大切に使いしていきたい。

人と人、心と心を紡ぐ水

広島県立広島叡智学園中学校 二年 松本 樹実

皆さんは普段水を何に使っているだろうか。私は洗濯物を洗濯する時や、洗い物をする時、手を洗う時などによく使う。では、水があることで何ができるだろうか。食べ物を育ててそれを食べたり、飲み物を飲んだり、病気を治したり。逆に水がないと、飲み水がなくなって喉が乾いてしまったり、食べるものがなくなったり、病気になってしまったりする。しかし、水は、先ほど例に挙げたように人間の生活を助けてくれるだけでなく、「人と人を巡り合わせてくれる」ものでもあると考える。このような考え方を持つようになったのは、『中村哲物語』を読んできた。

皆さんは中村哲という人をご存知だろうか。彼は元々アフガニスタンで医師をしていたが、診察をしていくうちに水があればすぐに治る病気ばかりだということに気づき、用水路を作ることを決意したのだ。今まで経験したことのない計画だったため、一から建設について学び始めた彼は用水路建設を「緑の大地計画」と名付け、スタッフを集めて計画について話した。この計画のために、戦争に行っていた人、難民になっていた人、出稼ぎに行っていた人などが続々とやってきて、およそ六百人の人が協力した。立場はそれぞれ違つが、「用水路を引いて、畑をよみがえらせるんだ。」という思いは一つだった。そして雨が降っても風が吹いても挫折せず、一生懸命尽力し、ついに完成した。水門の板を押し上げると、カラカラの土に水が染み込み、あちこちで歓声や拍手が沸き上がる。さらに、みんなが手に手を取り合い、体中で喜びを表していた。けれども翌日、用水路の一部が壊れてしまうというハプニングが起きてしまった。中村哲はやっと完成したにも関わらず、その努力が雲散霧消

してしまい、すぐ壊れてしまったことに不安を抱いていた。しかし、彼の目に映ったのは、現地の人たちが必死に用水路を復旧する姿だった。彼らは「中村哲に恩返しをしたい。」という気持ちでより強くなったのだろう。この想いが結果し、三日後には初めに作ったものよりも頑丈な護岸が出来上がったのだ。この用水路のおかげで約三十万人が農業を続けられるようになったり、診療所近くの砂漠化していた田畑が短期間でよみがえったりした。これにより、約百家族が家に戻るといふ奇跡が起きたのだ。

私はこの話を知り、心を強く打たれた。なぜなら、六百人もの人が水を集めるために力を合わせて哀歓をともにしたり、水が流れた時には老若男女関係なく手を繋いで喜び合ったりしたからだ。そのため、「水は、人と人、心と心を繋いでくれる存在であったり、人間の命を支えてくれる偉大なものだった」と考えるようになった。普段当たり前に使っている「水」はものすごい影響力があるということだ。水があることで人と人や心と心が結ばれ、水があることで人々は幸せを感じることができる。だからこそ、私は、手洗いや食器洗いなどで当然のように使っている水が無駄遣いしないよう、一回一回蛇口をひねって水を止めるなどの、簡単なことをこれからも続けていきたいと思う。さらに、実際にアフガニスタンに行くことは難しいが、この話を私の友達や家族に説明するなどして、水は人や想いを繋ぎ合わせてくれるものであり、とても貴重なものであるということを伝えたい。そして、少しでも多くの人が水を大切にし、よりたくさんの人に水の素晴らしさについて知ってもらいたい。

泥水を飲むこと

広島県立広島叡智学園中学校 二年 安永 圭吾

突然だが、とても汚い泥水を想像してみて欲しい。とても飲めそうにない茶色い、濁った、あの泥水だ。これを飲んだ自分はどうなるかも想像できると尚更良い。

最初からこのような話をしてしまっただけで申し訳ない。しかし、これを行わせたのは明確に理由がある。それは、泥水を飲むという行動を行って、汚れた水を当然のように生活用水と用いる人たちが存在することを知った。そこにあつた写真を見て、私はこう思った。「え、この水、泥水じゃないか。よく公園の砂場で泥団子を作る時の。」そして、それを知った私はこの出来事を半ば信じていなかった。私はその時泥水を飲んだらどうなるのだろうか、泥水を飲むなんて考えられないという考えにも囚われ、とにかく混乱していた。しかし、自分は絶対に泥水を飲みたくはないということだけは強く思っていた。

その後、私はその事実についてもっと深めたいと思い、さらに泥水を飲んだ後はどうなるのかということや、実際にそうになっている人は何人いるのかをインターネットで詳しく調べた。そのあつた内容に私は驚愕。あまりに自分と違う環境に対して、これを飲んだ人の症状にはコレラ、腸チフス、A型肝炎、赤痢にも関連しているということ、これを飲んで死亡してしまった人の人数は年間三十万人そして毎日八百人に上ることなどを知った。泥水を日常的には飲まないからこそ知らない事実だった。

僕らにとって日常ではないことは他にもある。僕は雨をただただ濡

れてしまうからという理由から嫌っている。農家さんは雨が降ると嬉しいのかもしれないが、この泥水を飲む人々の見方はまた一味も二味も違っている。それらの人々は雨を飲み水にすることがあると書いてあつた。これで命を繋いでいるなんて驚く。僕らにはあり得ないことである。僕らは泥水を料理に使わないし、もちろん飲み水にもしない。日本人は蛇口を捻るだけで出てくる水を使い、時に無駄にしても死ぬことはない。当たり前だが、当たり前ではないことも時にはある。

私はこれら人々の問題を解決したいという衝動に駆られた。そう言っても自分がしたことが全世界に影響を与える可能性は極度に少ないと言える。だから、今後を使う水の大切さを自覚し、未来に繋いでいくことを意識しようと思う。少しでも危機感を感じて、このままでは未来の人々が使う分の水がなくなってしまうという意識を持ち、水を大切に循環していかねければならない。具体的な方法として、洗剤を使いすぎないこと、天ぷらを揚げた後などの油をそのまま流さない、皿洗いの時の水はため置きしておくなどという方法がある。その一つ一つの行動が全世界に少しでも、ゆっくりでも、それが広まれば水の未来を変えられる。こうして大切に使用した水を今水不足のところに送ることができる。また、水が足りていないことを訴えて募金をするなどという行動を行うことができる。

改めて、最初の問いに戻る。

「とても汚い泥水を想像してみて欲しい。とても飲めそうにない茶色い、濁った、あの泥水だ。これを飲んだ自分はどうなるかも想像できると尚更良い。」

どうだろうか。どのように印象が変わっただろうか。日本に水があることを当たり前だと思わずに大切に一滴一滴使うことを心がけていてほしいと思う。そして、未来に水を運搬していくという使命を頭の片隅に置いておいてほしい。